

2025.11.12  
NIJL / EAJRS kotenseki seminar

# 江戸末期-明治最初期から昭和初期までの 日本の出版、流通の変遷

栗原 悠 (国文学研究資料館)  
kurihara.yutaka@nijl.ac.jp

# 本日のセミナーの構成

1. 江戸末期から明治前期における出版史
2. 明治後期から大正初期における出版史
3. 大正後期から昭和初期における出版史

# 江戸末期から明治前期における出版史

# 本木昌造と活字版摺立所



出典:国立国会図書館「近代日本人の肖像」  
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/6051/>)

文政7(1824)-明治8(1875)

安政2(1855)年、長崎の奉行所内に設立された活字版摺立所を指導。

- ⇒ オランダ商船からもたらされた蘭書を素材に印刷技術を研究。
- ⇒ 素材調達の課題や技術的な問題もありながら独自に活版印刷を試みていた先駆的な事例として評価される。
- ⇒ その後、活版印刷史黎明期の人材育成にも貢献した。

# J.C.ヘボンの宣教活動と出版



安政6(1859)年、宣教のために来日。

⇒ 岸田吟香とともに上海にあった米国長老派教会の印刷所・宣教美華書館を訪れ、『和英語書林』(慶應3(1867)年)の印刷・製本を依頼。それと同時に印刷技術の手ほどきを受ける。

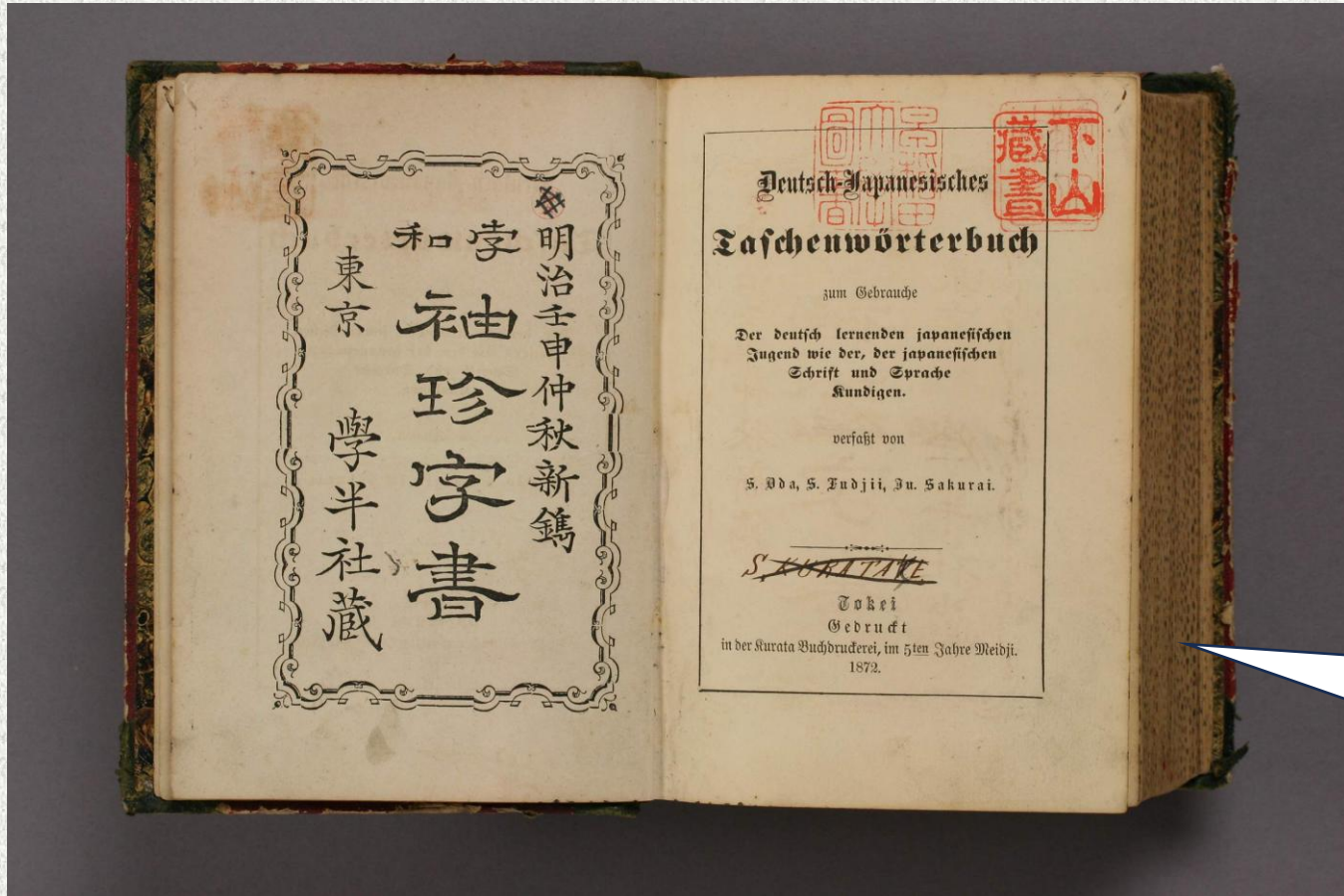
\* 『和英語林集成』などヘボンの関わった辞書類や和訳聖書については明治学院大学図書館デジタルアーカイブスで閲覧可能。

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/>

出典:明治学院歴史資料館デジタルアーカイブス

(<https://adeac.jp/meijigakuin-sch-arch/top/topg/person/index.html>)

# 国内の印刷技術の発展（『孝和袖珍字書』の事例）



明治5(1872)年、国内の印刷所で作られた洋装本の独和辞典の最も早い事例として挙げられる。

⇒ ただし、この時点では、こういう印刷技術が一般に普及していたわけではない点に注意する必要がある。

Tokai  
Gedruckt  
in der Kurata Buchdruckerei, im 5ten Jahre Meidji.  
1872.

『孝和袖珍字書』（早稲田大学古典籍総合DB）

[https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08\\_e0197/bunko08\\_e0197.html](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08_e0197/bunko08_e0197.html)

# 国内の印刷技術の発展（『傍訓英語韵礎』の事例）



明治5(1872)年、英学塾・共立学舎が刊行した英語学習のためのテキストブック。

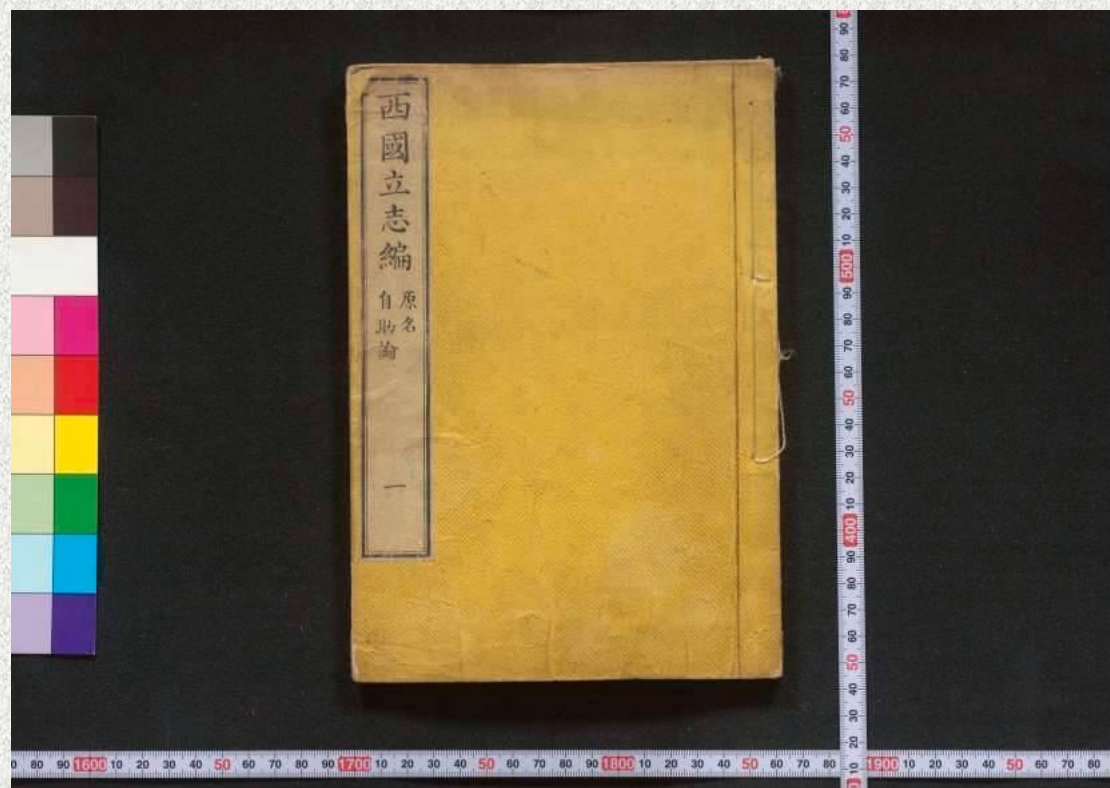
⇒ ボール表紙本(板紙(=ボール紙)を芯にした表紙、裏表紙をクロスで繋ぎ、平とじの本体をくるんだ形態)ので刊行された。

⇒ 単純な造本のため、少し後に文学を含むさまざまなジャンルの刊行物に採用されるが、その非常に早い事例として挙げられる。

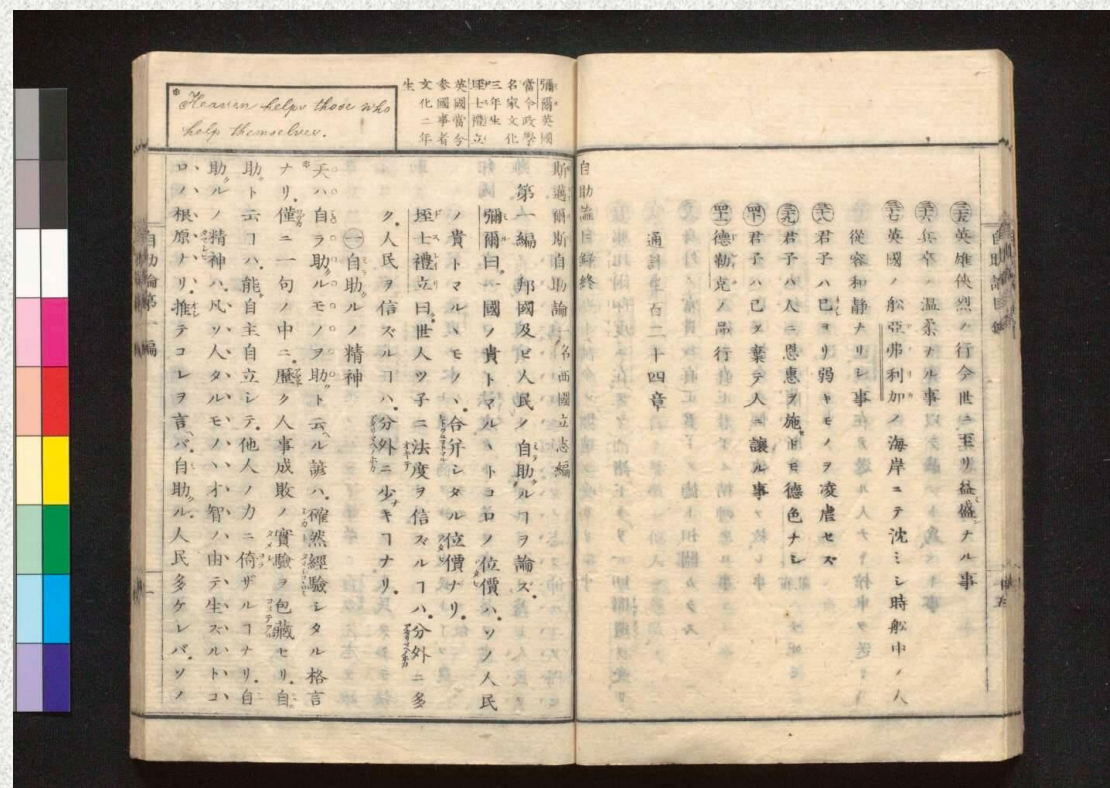
『傍訓英語韵礎』(早稲田大学古典籍総合DB)

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08\\_c0638/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_c0638/index.html)

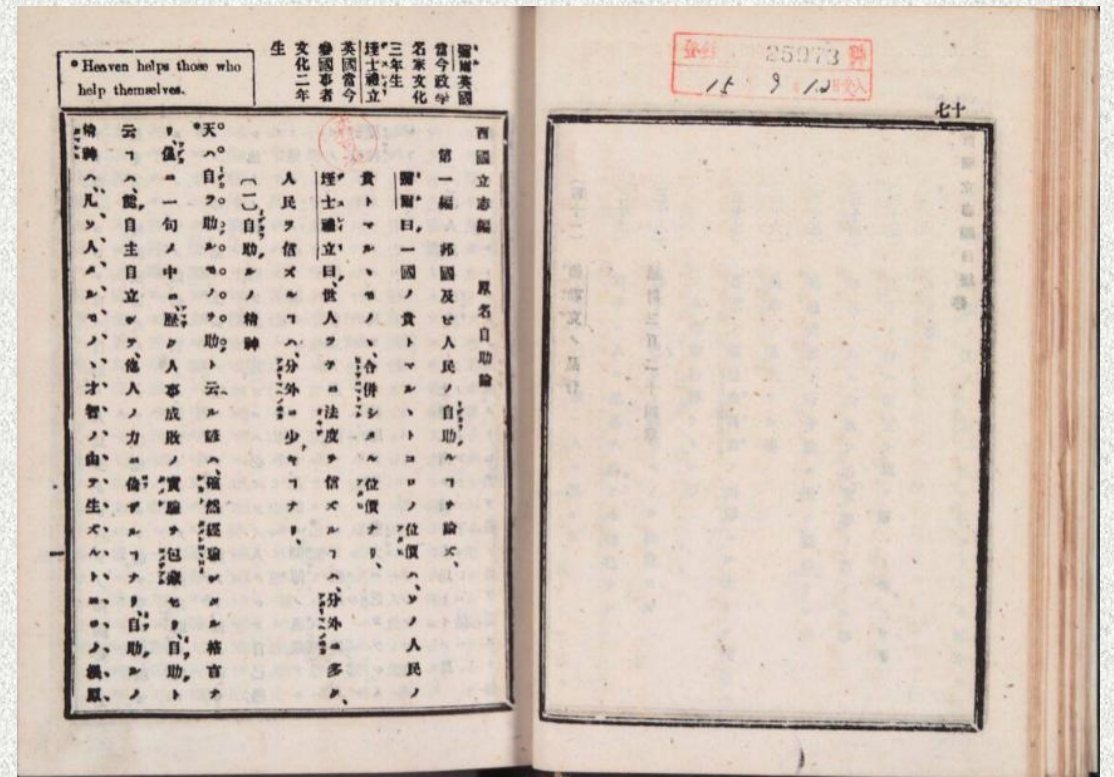
# 和装本から洋装本への変容（『西国立志編』の事例）



『西国立志編』（江戸東京博物館所蔵）  
出典: 国書データベース,  
<https://doi.org/10.20730/100450638>



同人社、明治3(1870)年。  
明治期を代表するベストセラーの啓蒙書だが、その初版  
は木版の和本の形態、全11冊で構成されていた。



『改正／西国立志編』（弘前市立弘前図書館所蔵）  
 出典: 国書データベース,  
<https://doi.org/10.20730/300011229>

外を革の背と表紙がくるむ形態。改正を施し、本文の組み方こそ近いものの、活版用紙両面刷りとなっているので、もともとの11冊の内容が746ページの一冊本に縮約されている。

\* 本書の出版事情をめぐる問題については、浅岡邦雄『〈著者〉の出版史』（森話社，2009）に詳しい。

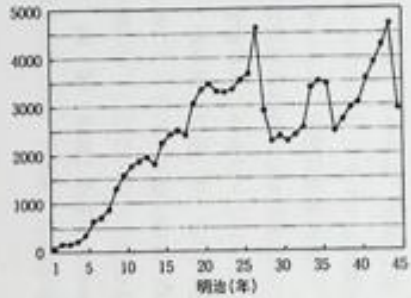
・(和本のように袋綴じにしない)洋紙両面印刷×(木版よりもずっと小さな文字を作れる)金属活字という形式は、多くの情報量を詰め込めるという工業的メリットがあり、そうした情報集約性が求められる書において率先して採用されていく。

・明治9(1876)年、現在の大日本印刷(DNP)の前身である印刷会社・秀英舎が創業。急速な需要増加に応える形で設備投資を進めていき、事業を拡大。

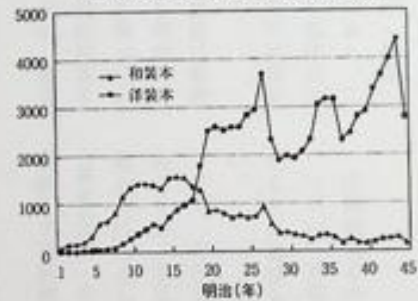
# 出典:大沼宜規「明治期における和装・洋装本の比率調査 帝国図書館蔵書を中心に」(『日本出版史料』08, 2003.05, pp.135-136)

明治期における和装・洋装本の比率調査(大沼)

グラフ1-1 明治期の出版総数



グラフ1-2 和装本・洋装本の点数



グラフ1-3 和装本比率の変遷

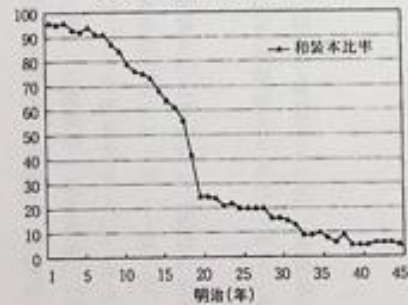


表1 和装本・洋装本の点数, 和装本比率

明治(年)	和装本 総計	洋装本 総計	明治期間 書総計	比率
1	70	3	73	96
2	155	9	164	95
3	160	6	166	96
4	198	15	213	93
5	213	29	242	92
6	589	40	629	94
7	642	64	706	91
8	799	75	874	91
9	1135	168	1303	87
10	1322	259	1581	84
11	1403	359	1772	79
12	1412	458	1870	76
13	1358	553	1951	71
14	1310	487	1797	73
15	1527	716	2243	68
16	1551	864	2415	64
17	1525	963	2492	61
18	1361	1065	2406	56
19	1272	1774	3046	42
20	831	2508	3339	25
21	854	2592	3443	25
22	784	2517	3301	24
23	700	2577	3277	21
24	750	2588	3338	22
25	696	2833	3529	20
26	721	2937	3658	20
27	915	3687	4602	20
28	566	2323	2889	20
29	372	1891	2263	16
30	386	1978	2364	16
31	337	1931	2268	15
32	308	2077	2385	13
33	233	2314	2547	9
34	314	3050	3364	9
35	342	3163	3505	10
36	289	3152	3441	8
37	151	2311	2462	6
38	248	2452	2700	9
39	162	2798	2960	5
40	159	2907	3066	5
41	190	3364	3554	5
42	241	3653	3894	6
43	255	3994	4249	6
44	278	4397	4675	6
45	154	2777	2931	5
小計	29352	80698	110050	27

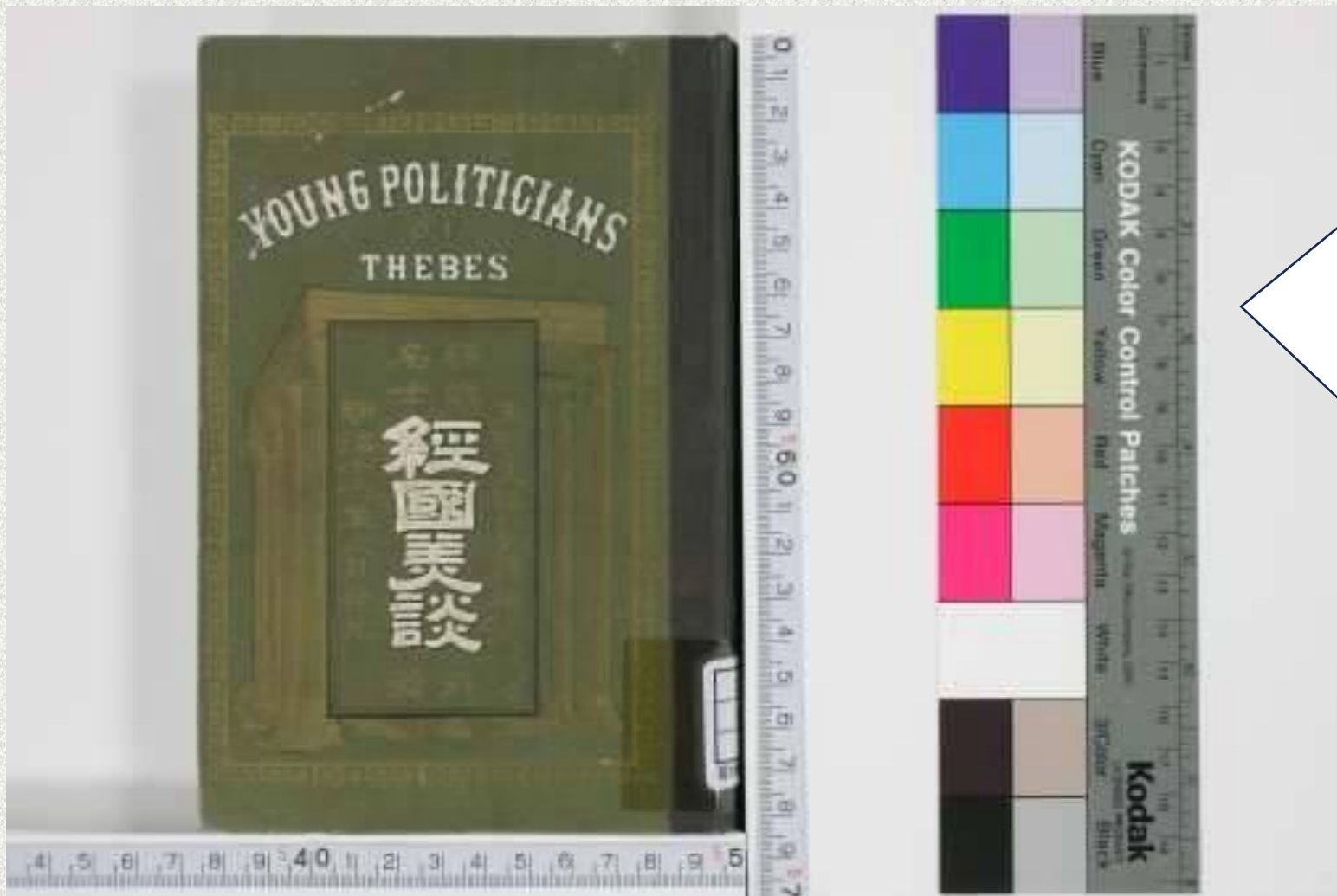
表2 各編及び大分類毎の和装本比率

編目	和装本	洋装本	比率
1	100	0	100
2	100	0	100
3	100	0	100
4	100	0	100
5	100	0	100
6	100	0	100
7	100	0	100
8	100	0	100
9	100	0	100
10	100	0	100
11	100	0	100
12	100	0	100
13	100	0	100
14	100	0	100
15	100	0	100
16	100	0	100
17	100	0	100
18	100	0	100
19	100	0	100
20	100	0	100
21	100	0	100
22	100	0	100
23	100	0	100
24	100	0	100
25	100	0	100
26	100	0	100
27	100	0	100
28	100	0	100
29	100	0	100
30	100	0	100
31	100	0	100
32	100	0	100
33	100	0	100
34	100	0	100
35	100	0	100
36	100	0	100
37	100	0	100
38	100	0	100
39	100	0	100
40	100	0	100
41	100	0	100
42	100	0	100
43	100	0	100
44	100	0	100
45	100	0	100
合計	29352	80698	110050

・文芸書の出版についてもボール表紙本が普及していったこと  
によって近世以来のジャンルによる形態的区別（「格」の意識）  
を無化する規格化が進行。

・一方、敢えて明確なターゲット層を想定し、ほかとの差別化を  
図る出版ビジネスモデルなどもあった。

（cf. 磯部敦『出版文化の明治前期 東京稗史出版社とその周辺』ペリカン社,  
2012）



政治小説におけるボール表紙本の一例。

題名の後ろに神殿を模した絵が確認でき(石版多色刷りしたものをボール紙に貼っている)、意匠面での特色が前面に出ている。

ただし、同じジャンルの文芸作品のうちでも和装本などもあり、まだまださまざまな製本方法によって成立した書籍が混在する時期だった。

『斎武名士／経国美談 前編』(国文学研究資料館所蔵)  
出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/300024867>

# 明治後期から大正初期における出版史

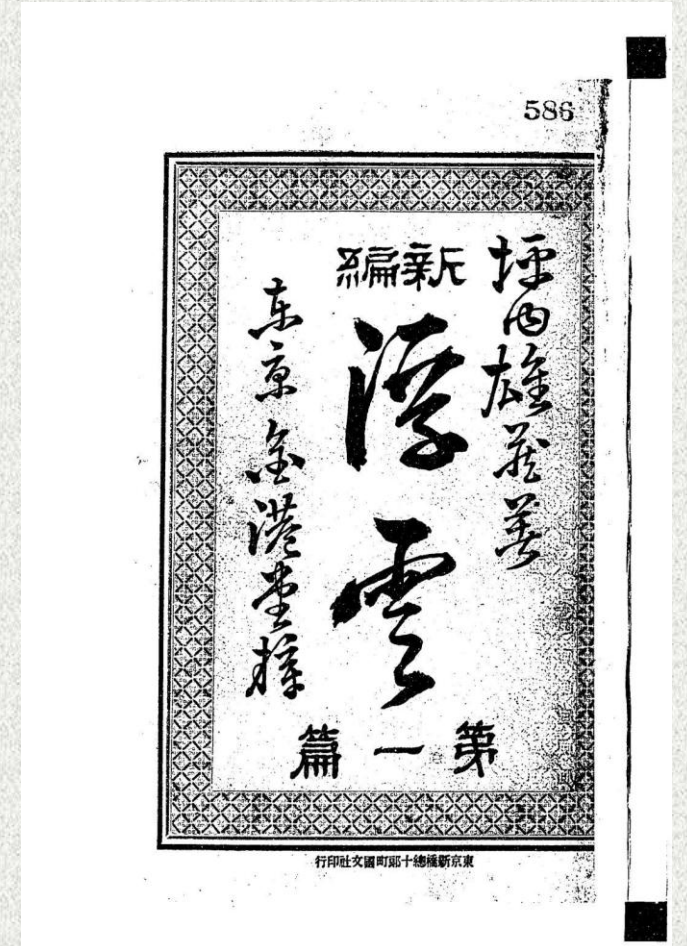
# 教科書出版と金港堂

需要量的に活版印刷では間に合わなかったこと、精細な図像の印刷に関してはまだ技術が低かったこともあって、教科書に関しては明治39(1906)年の国定化まで木版印刷が主流だった。

その教科書出版で台頭した金港堂は、二葉亭四迷『浮雲』や文芸雑誌『都之花』を刊行し、文芸出版がにわかには活気づき始めた。

二葉亭四迷 著『新編浮雲』第1編,金港堂,明20-24. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/885481>

同書(国書DB、高知市高知市民図書館)カラー画像と書誌データ <https://dl.ndl.go.jp/pid/885481> \*所蔵者による結び綴じあり



# 陸続する雑誌出版 ①

明治20(1887)年、『反省会雑誌』、『国民之友』創刊

## 『反省会雑誌』

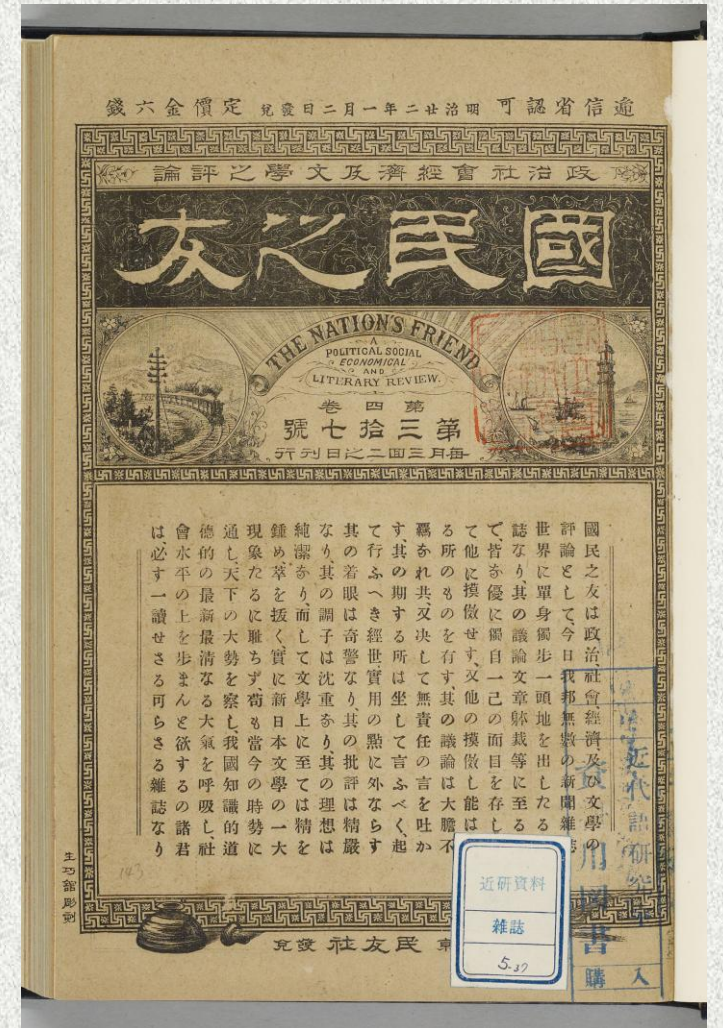
⇒ 西本願寺系の仏教雑誌として出発、のちに『中央公論』と改称し、滝田樗陰編集長時代には文芸に力を入れた誌面作りが行われる。現在も継続刊行中。

## 『国民之友』

⇒ 徳富蘇峰の民友社が刊行。森鷗外「舞姫」やツルゲーネフ(二葉亭四迷訳)「あひづき」などを掲載したことで知られる。一時期は木口木版の精巧な図版(生巧館制作)を表紙に用いていた。

『国民之友』第37号, 1889.01(国立国語研究所蔵)

<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/show.php?title=kokuminnotomo&issue=37&num=1&size=50&page=0>



## 陸続する雑誌出版 ②

明治22(1889)年、「新著百種」シリーズ刊行開始

「新著百種」1冊目『二人比丘尼色懺悔』(尾崎紅葉)

実態としては「叢書」だが、雑誌を自認していた。造本自体は紙くるみ本とは言え、凝った装幀で人情本を想起させる。本文でも各巻(=各章)冒頭部分で活字の上に内容と関わる小道具の図像が重ねて印刷されているなど手間のかかる印刷技術が盛り込まれている(続刊の装幀もこれと同じ意匠を踏襲していく)。

⇒ 造本上のバラエティといった点も次第に強く意識されるようになってきた。



画像は個人作成

# 春陽堂と博文館

## 春陽堂

流行していた戯作翻刻や翻訳小説のボール表紙本、敢えて時代に逆行する木版和装本の小説群（「新作十二番」や「文学世界」）のほか、紅葉『多情多恨』（明治30（1897）年）や『金色夜叉』（明治32（1899）年～）などを手がける。

## 博文館

『文章倶楽部』や『太陽』などの雑誌出版で存在感を示す。また、過渡的な流通システムとしての売捌所にとって代わる取次・東京堂（現在のトーハンの前身の前身）や自前の印刷所（共同印刷の前身）の創設など出版・流通事業を一手に集約してさまざまな出版物を生み出していった。



明治29（1896）年刊行、塩井雨江、武島羽衣、大町桂月『美文韻文 花紅葉』  
現在の文庫本とほぼ同じ、活版におけるいわゆる袖珍本規格。  
（早稲田大学古典籍総合DB）

[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko14/bunko14\\_b0082/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko14/bunko14_b0082/index.html)

# 夏目漱石の造本美学

## 『吾輩ハ猫デアル』上篇

⇒ 明治38(1905)年、大倉書店、服部書店の共同出版として刊行。猫の視点から文士社会を諷刺するその内容もさることながら、菊判上製90銭という当時としてはかなり高い価格設定も話題となった。

⇒ 表紙や扉、カットなどの装幀は、この後漱石山房原稿というオリジナルの原稿も手がける橋口五葉が担当、挿絵は上篇が先の中村不折、中後編が洋画家の浅井忠。この後、文芸書において流行していく角背を採用。

\* 橋口五葉については、今年府中市美術館で「橋口五葉のデザイン世界」(5月25日(日)~7月13日)という回顧展示が開催、図録では漱石をはじめとするその美しい文芸書の装幀も数多く紹介された。

[https://www.city.fuchu.tokyo.jp/art/tenrankai/kikakuten/Hashiguchi\\_Goyo.html](https://www.city.fuchu.tokyo.jp/art/tenrankai/kikakuten/Hashiguchi_Goyo.html)

・明治20(1887)年、明治8(1875)年の出版条例改正時点で定められていた出版者専売の利の保護が独立した版權条例となる。さらに明治26(1893)年には版權法が定められる。

・明治29(1896)年、フランス、イギリスなど8カ国を原加盟国としてベルヌ条約が締結。日本もこれに批准するために明治32(1899)年に著作権法を施行。

⇒ 著作物の権利保護が明確に示されたものの、実態として著作者の地位が保証されたことをただちに意味しない。

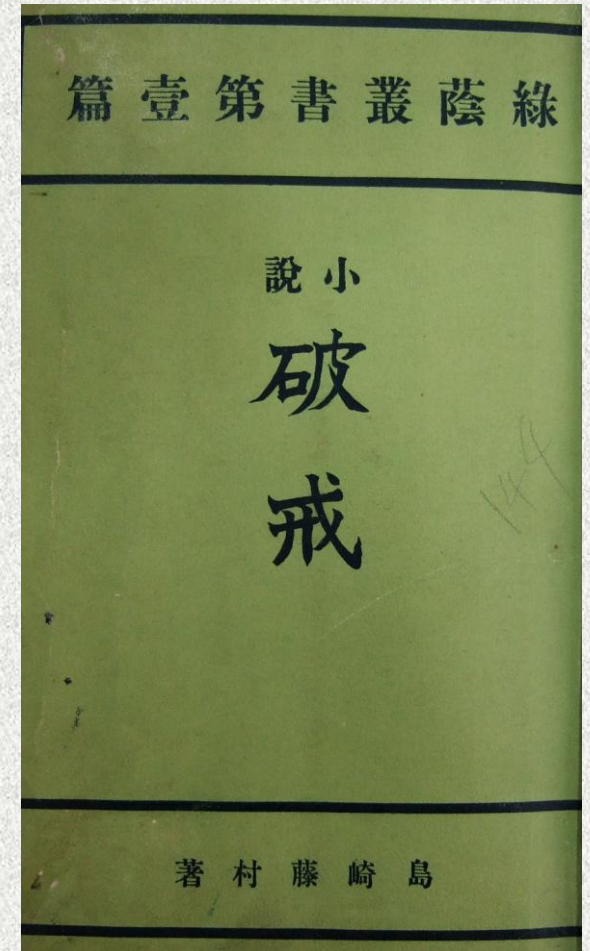
# 自費出版本『破戒』（島崎藤村）の試み

明治39（1906）年、刊行。

出版者は自費出版なので島崎春樹（本名）。

四六判の並製本、表紙は濃い緑を基調としつつ、罫線以外には修飾のない簡素な装幀。ページ数は600近くありながら、定価は70銭と「猫」よりも安い。しかし、見た目の簡素さとは裏腹に秋山碧城の肉筆を石版刷りした題字やこだわった構図の鏗木清方による口絵（白ヌキ薄色刷）、あるいは地図（「千曲川流域之図」）の挿入など自身のアイデアを余すことなく盛り込んでいる。

⇒ 出版社との関係に対する異議申し立てから始まったが、自費出版という形で作られた本書は、あらゆる面で自分の思いを反映させることができた（ただし、金策には苦勞している）。



画像は個人作成

# 文芸書出版の多様化

技術的には、世期末に始まった活版カラー印刷も一般化、また国産の断裁機や針金綴じ機などの生産も始まり、製本の機械化が進行。オフセット印刷の技術なども紹介され、バラエティに富んだ文芸書の出版が可能に。

靱山書店の「胡蝶本」(泉鏡花『三味線堀』や永井荷風『すみだ川』、谷崎潤一郎『刺青』etc.)など瀟洒な造本によって美術的な価値も高まる。

『日本橋』(泉鏡花, 千章館, 大正3(1914)年)の小村雪岱や『月に吠える』(萩原朔太郎, 感情詩社・白日社, 大正6(1917)年)を手がけた恩地孝四郎など装幀画家たちのプレゼンスも向上。漱石『こゝろ』(岩波書店, 大正3(1914)年)や芥川龍之介『羅生門』、谷崎潤一郎『異端者の悲しみ』(ともに阿蘭陀書房, 大正6(1917)年)など自装本という選択肢も。



『三味線堀』(山梨大学附属図書館所蔵)  
出典: 国書データベース,  
<https://doi.org/10.20730/300041933>

# 大正後期から昭和初期における出版史

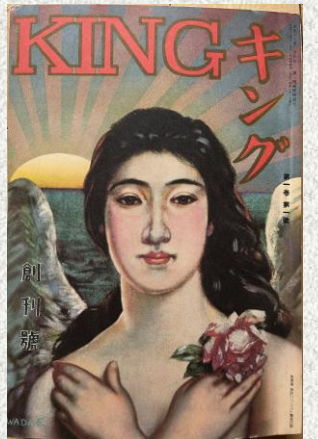
# 「大衆」と雑誌の時代

出版界における眠れる鉱脈として社会のなかの「大衆」が見出される。

大正8(1919)年、改造社が『改造』を創刊。社会問題や労働問題を熱心に取り上げるとともに志賀直哉「暗夜行路」、谷崎潤一郎「卍」、林芙美子「放浪記」など数多くの文芸作品を掲載した。



従来あった女性誌のなかでもファッション的な要素を前面に打ち出したプラトン社の『女性』(大正11(1922)年)や(途中から)左派的な主張を展開した『女人芸術』(昭和3(1928)年)など特色ある雑誌が現れる。



あるいは『文藝春秋』(文藝春秋社, 大正12(1923)年)や『キング』(大日本雄弁会, 大正14(1925)年)などこれまでには見られない大々的な宣伝戦略を用いて広い読者層に訴えかけていく雑誌なども創刊された。

(cf. 佐藤卓己『「キング」の時代 国民大衆雑誌の公共性』岩波現代文庫, 2020)

出典:  
Wikipedia

# 『現代日本文学全集』から円本ブームへ

大正15(1926)年、『現代日本文学全集』(改造社)刊行。

一冊一円、全巻予約制、毎月一冊ずつ刊行していく。想定以上の予約者数を確保した。

映画「現代日本文学巡礼」と抱き合わせの作家講演会などのユニークな宣伝手法で知られる。

(cf.庄司達也、中沢弥、山岸郁子[編]『改造社のメディア戦略』双文社出版, 2013)

春陽堂の『明治大正文学全集』など類似企画が乱発し、ブームも数年で終わったものの、それまでとは規模の異なる書籍への需要が設備投資を促し、業界全体として体制を拡充していった。



画像は個人作成

# 「古典的価値ある書」の器としての岩波文庫

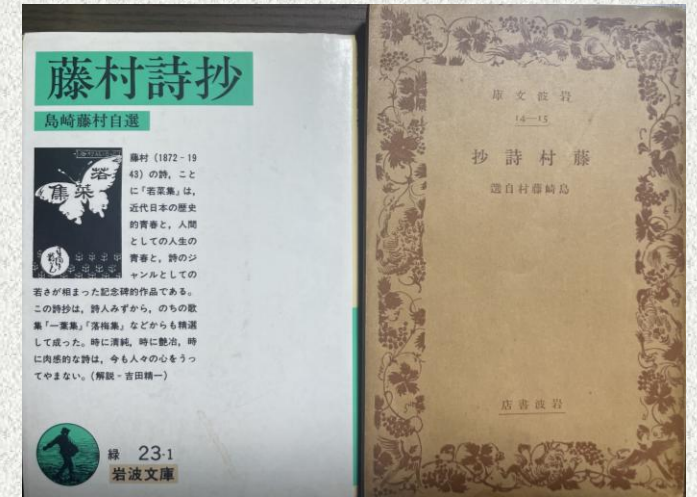
昭和2(1927)年、岩波文庫創刊。

ドイツのレクラム文庫を模範として、(現在とは若干判型は異なるが)文庫本として「万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において逐次刊行」することを目指す。

「読書子に寄す 岩波文庫発刊に際して」には、『現代日本文学全集』(一括予約販売)への批判が垣間見える。

創刊ラインナップは、『こゝろ』や『五重塔』(幸田露伴)、『藤村詩抄』などすでに定評のあるものを選びすぐっている。

⇒ 円本ブームへの批判から出発しているとは言え、大量出版時代の産物という意味では円本ブームとそう遠くない企画であった(である)。



昭和13(1938)年12刷と平成2(1990)年72刷の岩波文庫『藤村詩抄』。地の長さはほぼ同じだが、旧版は背が少し高く造られている(画像は個人作成)。

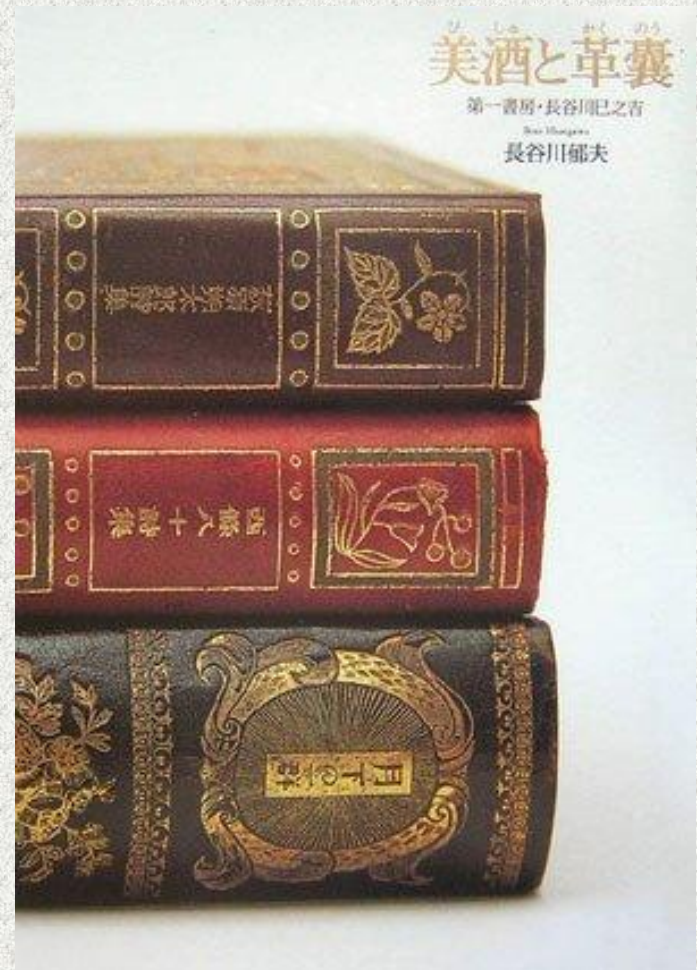
# 消費の対象に抗う文芸書 ①

大正12(1923)年、文芸雑誌『黒潮』などの編集に携わってきた長谷川巳之吉によって第一書房が創業される。

堀口大學によるフランス訳詩アンソロジー『月下の一群』(定価4円80銭, 大正14(1925)年)や大田黒元雄『露西亞舞踊』(定価10円, 大正15(1926)年)など部数限定で革装に金をふんだんにあしらうなど装本に過剰にこだわった豪華本を多く出版したことで知られる。

⇒ 商品として大量に流通する円本や文庫と同じ時代に、それとは真逆の企図から編まれた。

(cf.長谷川郁夫『美酒と革囊 第一書房・長谷川巳之吉』河出書房新社, 2006)



## 消費の対象に抗う文芸書 ②

谷崎潤一郎「装幀漫談」（『読売新聞』昭和8（1933）年6月16日）

「私は自分の作品を単行本の形にして出したときに始めてほんたうの自分のもの、真に「創作」が出来上がった気がする。単に内容のみならず形式と体裁、例えば装丁、本文の紙質、活字の組み方等、すべてが渾然と融合して一つの作品を成すのだと考えている」

⇒ 自筆和装本『蘆刈』（創元社、昭和8（1933）年 ＊限定500部）

菊判（横長立て綴じ）に、自筆の本文を特注の雁皮紙にオフセット印刷し、表紙、見返し、署名紙全て別の紙を用い、何度も印刷所へ訪れ、刷具合をチェックして完成された。

⇒ 同様の試みは『蓼食う虫』や『盲目物語』、『吉野葛』などでも行われたが、一見アナクロニズムとも思えるようなこうした谷崎の本造りもまた書籍が大量消費されゆく活字出版隆盛の時代への一つの批評的な営為として見ることもできる（ほかにも同時期の野田書房や江川書房など独自の美学、純粹造本などと呼ばれる事例もあり）。